

第1回紫友セミナー

長七、沢哲、真ちんの流れを辿る

寺門 克

(1)

第1回の紫友セミナーは、先の「伊藤長七アーカイブス記念フォーラム」で記念講演をされた粕谷一希さんをお願いするというところで、御都合を伺ったところ、あいにく、京都での講演の先約があったそうので、私は代役です。しかし、代役を務めるにはまさに役者不足でして、とはいえピンチヒッターというものはとにかく見逃しの三振はゆるされなさい。同じ三振でもバットをぶつての三振をしますので、お許し願いたいとおもいます。

長七、沢哲、真ちんは五中、小石川の流れそのものです。初代伊藤長七のあとは昭和5年4月から、落合寅平、11年11月から井上宗助、20年6月から沢登哲一、33年4月から寅平の息子である落合矯一、そして39年4月から真田幸男で学園紛争の44年まで。その流れの中で沢哲と真ちんは、長七の創りあげた自由で伸び伸びした校風に掉さした印象がとくに強いのです。とくに真ちんは五中の第三回卒業生ですから、長七の薫陶を直接受けていますし、昭和7年から母校五中の教師になって、27年まで在籍して、沢登校長時代に教頭を務めています。

まあ、こんなことは『70年史 立志・開拓・創作』を読んでいただければいいことで、話はこれくらいにいたします。

さて、この校舎のすぐ傍に六義園があります。將軍綱吉の側用人から大老格にまでのしあがった柳澤吉保が綱吉に貰った土地につくったんですよね。その六義園が、五中、小石川と関係がある。どんな関係だとおもいますか。

脱線のようにですが聴いてください。六義園の六義とは、中国の周時代の『詩経』四書五經の一つですが、このなかで詩を体裁と表

現で六つに分類をしました(風・雅・頌・賦・比・興)。これに倣って短歌を六つに分けて六義(むくさ)としたのが、古今集の撰者の一人、紀貫之です。かれが書いた古今の仮名序にあります。「そもそも歌の様六つなり。唐の詩にもかくと有るべき……」

そへ・かぞへ・なずらへ・たとへ・ただこと・いはひ。この六つです。

綱吉の歌学方から「古今伝授」をうけた吉保は、この六つの歌の形を庭園に配しようとしたのです。

で、吉保に「古今伝授」をした歌学方が北村季吟。今では芭蕉の師だったということでも知られていますが、京都で神職についていたとき、江戸幕府から、將軍の歌の先生に任命されたほどの、その道の権威だったのです。季吟がいた神社は新玉津島神社といい、藤原俊成の屋敷跡にありました。和歌山の和歌の浦のある玉津島神社を勧請したものです。玉津島神社に祀られる玉津島明神は住吉大社の住吉明神、柿本大神とともに和歌三神に数えられていました。このあたりは樹木の配置などで、古今の六義を形にしていたといわれ、季吟は吉保にそれを説いていたものと思われれます。

もう察しのいいかたはお気づきでしょう。季吟は私たちの校歌の作曲者、北村季晴の直系の先祖なのです。季吟は和歌ばかりではなく、日本の古典文学の研究者として『源氏物語』など沢山の古典の注釈書をあらわしています。その話は端折ります。俳諧のための素養の水準をはるかに超えた勉強をしたのでしょう。

季晴は江戸っ子です。季吟から代々江戸に住み、七代目である季林も將軍家茂の侍講を務めていて、家屋敷は銀座っ子が通った泰明小学校のあたりにありました。小学校が出来るといって赤坂のほうへ転居しました。季晴はその息子です。明治学院から、東京音楽学校に転じ、卒業するとまずは師範学校の教師になりました。

その季晴がなんで五中の校歌の作曲をしたか。六義園の縁ではありません。

季晴は明治学院で島崎藤村と同級で仲良くなりました。藤村は11歳で上京、泰明小学校から三田英学校、共立学校などを経て明治学院に進みました。卒業すると英語などの教師となりいくつかの学校に勤めましたが、その間、泰明小学校時代の級友北村透谷らの『文学界』の仲間に加わり、浪漫派詩人として人気を集めました。『若菜集』は東北学院時代の作品です。次いで明治32年小諸義塾の教師になり、『破戒』を書くため上京する38年までそこにいました。

このとき、藤村と長七、そして季晴との縁が結ばれました。

(2)

御承知のように長七は長野師範をでて、諏訪高等小学校、下諏訪小学校を経て小諸高等小学校に転任になったのは明治33年です。小諸を去ったのは34年。この一年の間に長七と藤村は急速に親しくなったでしょう。長七は長野師範同窓の太田水穂たちと新しい和歌に取り組んでいましたから、お互い相通ずるところがあつたに違いありません。季晴も30年から34年まで長野師範で教鞭をとっていましたから、当然交友があつたと考えていいのではないのでしょうか。季吟の『万葉集集穂抄』『八代集抄』などに話が及んだかもしれません。

また、藤村が小説に転じて書いた『破戒』に主人公の親友として登場する土屋銀之助のモデルは長七であるとされています。諏訪湖畔の生まれ、五分刈頭、赤ら顔、腕まくりして快活に談じ、笑う、正直で友達思い。こんな熱血漢として描かれた銀之助です。五中の朝礼で生徒を前に話しながら感極まると泣き出したという長七の若いころの姿とみるとうなずけます。銀之助は東京農科学校、東大農学部となるのですが、そこへ進むため小諸を去るのですが、これは小諸を一年

で去って東京高等師範に進む長七と行動が重なります。

『破戒』には巻頭に献辞があります。「この書が世に出づるに至りたるは、函館にある秦慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のたまものなり。労作終わるの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまえにささぐ」というものです。

この神津猛という方は、信濃の名家の12代目で、五中13回卒、神津康雄さんの御父君です。藤村との関わりは神津さんの近著『随処に主となる』に詳しく書かれています。

神津猛は11歳で家督を継ぎ、慶応義塾在学中、福沢諭吉に品川の古墳に連れて行かれ、土器の発掘の手伝いをした体験を契機に考古学に傾注、信濃に戻ると近辺の古墳を発掘、膨大な土器や玉、矢じり、石斧などを発掘しました。ちなみに、これらはいま、長七の資料が預けられている長野県立歴史館におさめられています。

藤村と知り合うのは、塾長の木村熊二に招かれ小諸義塾を訪れたときです。熊二は明治女学校の創立者で藤村も一時その教師でした。小諸義塾設立にあたり、その塾長として招かれた熊二は藤村を呼び寄せました。そして、藤村と猛を引き合わせたのです。

藤村が明治学院に月給60円で来てくれという誘いを受けたとき、義塾での月給は25円でした。藤村は小諸を離れる決心をしたのですが、同僚が留任運動を始めます。自分たちの月給の二割削減がいい、藤村を残してくれ：と。それを漏れ聞いた猛は熊二に義塾への寄付を申し出ます。感激した藤村は上京を思いとどまり、猛との交友は深まりました。

小説に転じ、全精力を注ぐため、いよいよ上京しようとするとき、藤村は猛に4百円の借金を申し入れます。名家の当主とはいえ、右から左へと出せる額ではありませんから、何回かに分けて送りました。

明治39年『破戒』は完成します。初めは自費出版でした。高い評価をつけ、藤村は自然主

義文学の代表者の一人とされるようになってきたのです。猛のところへ『破戒』の草稿や執筆した机などが、送られています。神津康雄さんは浪人時代、その机で勉強したそうです。さて長七は高等師範とその研究科を出るとそのまま付属中学の教師になります。明治44年、朝日新聞に黒風白雨楼の筆名で連載した『現代教育観』が認められ、大正7年新設、開校翌8年4月の東京府立第五中学校の校長となったことは御承知のとおりです。

長七には生徒の父兄のほかに応援団がたくさんいました。寄付も集まったようです。そこで会を設けました。紫友会です。なぜ紫の友なのか。校章も紫草の花です。これは長七が『古今集』にある「読み人知らず」の『紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞみる』が好きだったからではないかとみています。自ら作詞した校歌 はじめは紫友会の歌として作ったようですが、この歌を踏まえて「ひとと咲ける野の花のゆかりの色を翳す時」という一行を入れています。この詩に曲を付けるにあたって、誰に頼むか、長七の頭には、季晴が浮かんでいたのではないかと思われまます。季晴が長野師範時代に、いまは長野県歌となっている「信濃の歌」の作曲をしたのを長七は知っていたでしょうし、長七が小諸を去った年にやはり長野師範を辞め、作曲活動に専念しようと上京したことも承知、東京音楽学校に招かれ、日本の古典音楽を五線譜に採譜する仕事をしていたことも耳にしていたでしょう。交友もあつたでしょう。とにかく季晴に頼みました。依頼は直接したかもしれませんが、藤村を通してたかもしれませんが、できた校歌は皆さんが感じておられるように荘重な曲調です。それは季晴が古典音楽に取り組んでいたことと無関係とは思えませんが、いかがでしょうか。話の流れが随分澱んだように申し訳ありません。ですがもう少し迂回します。

長七が五中で行ったいろいろな行事の中で特筆されるのは「夏期転地修養隊」ですが、

この行き先については藤村に相談したそうです。そして藤村の答えは「それなら信濃の神津猛さんのところがよからう」ということでした。神津さんは快諾。長七は第1回の生徒120人をつれて行ったのですが、その中にのちに「騎馬民族征服王朝説」で知られる考古学者・江上波夫さんがいたのです。江上さんは日経の『私の履歴書』にも書いていらっしゃるようですが、そこで古墳の出土品に接したのが考古学の道に進むきっかけになったのだそうです。こうしたこと、みな長七の教育の成果として語られています。生徒にさまざま体験させ、生徒と触れ合うこと、そこに五中の校風が育まれたのだと思います。

(3)

沢登哲一、沢哲。私たちの同期生は 哲つつあん と呼んでいます。将校バンドに冷や飯草履、坊主頭で口をへの字に結び「おめえたち」と伝法な口調で話すのですから、粗っぽい印象を初めは抱く人が多いでしょう。でも違います。

在学中は、それほど接触はありませんでした。入学式で、「おめえらはまだ卵の殻を半分尻に付けているが、この学校では紳士として扱う。なにをやってもかまあねえが、他人様に迷惑だけはかけんなよ」といわれて、かなりやんちゃもしましたが、校長室に呼ばれて頭をさげて、一杯飲まされるといふ 栄誉に恵まれるほどのやんちゃはしなかったからです。伊藤整が訳したD・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』が猥褻か否かを争った「チャタレー裁判」で検事側の証人になったことを遠く聞いていました。

一度だけ授業がありました。休講の先生の代講だったのかもしれませんが。教室に入ってくるや、黒板に「まこと」と一字一字離してかきました。

「まことって何だ」
指された者はいろいろ答えました。真実、

誠実などなのです。沢登さんのいいたかったことは「こころのありかた」ということだったように記憶しています。そしてその「こころのありかた」は「ふるまい」に現れる。「自由とまこと」を説かれたことに今頃気づいています。でもなかなか身につきません。卒業後は一緒に酒を飲む機会に恵まれました。保田の寮では車座で飲み、一緒に歌もうたいました。夜も更けたとき、哲つつあんなが立ち上がり、わたしたちにも立つように促しました。そして肩を組んで歌いだしました。「そーろそろ帰ろうか、帰ろうか、帰ろうか」

退き方を教えられたのです。その翌朝、妙本寺の本堂で開かれている宝物展、虫干しを兼ねているようでしたが、そこへ、いつも本堂へいくときと同じで、パンツ一丁で行こうとしたら、哲つつあんに叱られました。「近所の人もきている、どんなボロでも上へ引っ掛けていけ」と。いい気になつて裸で行こうとした自分が恥ずかしくなつて、汗だらけでよれよれの浴衣を着ながら、涙が出そうでした。

浪人中、絵葉書が舞い込みました。「琴瑟相和す」ということについて書いてあり、左下に小さく「哲」とありました。哲つつあんなが呉れたのです。嬉しくて宝物のように仕舞い込んで、いまは行方不明ですが、その万年筆の筆跡は脳裏から消えません。

卒業10周年の同期会を伊香保温泉の旅館で真夏に開いたときです。同級の飲み仲間と午後3時に着いたとき、すでに哲つつあんなは来ていて座敷の窓際に正座していました。ちなみに哲つつあんなは飲むときも膝は崩しません。

宴会は6時からですが、あと3時間お待ちさせるわけにはいきません。われわれも、列車の中でやってきたからいい、とは思いません。宴会のウォーミングアップのつもりでしたが、いつのまにか走り出し、スピードもできました。そしてそのまま宴会。それがハネると、哲つつあんの部屋に移動。12時をだいぶ

回ったところで「そーろそろ帰ろうか」と失礼しました。

そのとき、12月に神田のチャンコ屋で飲む約束を何人かできました。日も時間も決めました。「哲つつあんなも」というと「ふむ」と口を結んだようでした。なにしろ哲つつあんなは飲みながらはあまりしゃべりません。わたしたちは哲つつあんなの前で騒ぎたい。哲つつあんなは、わいわい騒ぐわたしたちを見回しているだけです。

12月のその日、チャンコ屋に行くと、哲つつあんながちゃんと来ていました。夏以来、だれも哲つつあんに連絡しなかったもので、いらつしやるかどうか、正直諦めていました。わたしたち同士も連絡し合わず、だれが来るかも分からないままでした。途中で出会った仲間と「誰かが連絡すべきだったよな」といいながら店に入ったのです。

約束は守るもの。ふるまいで教わりました。その日はそれから上野へ出て、本牧亭を冷やし、その裏の居酒屋でひっかけ、本郷の呑喜まで。呑喜はいうまでもありません。哲つつあんの一高時代からの馴染のおでん屋です。醤油の色がこれでもかというほど濃く滲みたおでんです。それが酒に合うんです。この時も哲つつあんなと交わした言葉は覚えていません。何も言わなかったわけではないでしょうが、どう別れたかも。

哲つつあんなは75歳で亡くなりました。葬式は白金の清正公前に近いお寺でした。焼香の列が長く、長く続き、やっと記帳の近くにきて、不思議な表示を見つけました。親戚とか、小石川関係とかに分かれて記帳するのですが、その中に「立川会」というのがあったのです。住んでおられたのは国立の見心寮です。なぜ立川なのか。

国立へ向かう中央線の終電は立川止まり。酔って寝過ごすと、引き返す電車が無い。仕方ないので立川駅まへの居酒屋で飲みながら始発を待つ常連が出来て、それが立川会。哲つつあんなは、その中心人物だったらしい。

その話を聞いて、仲間4、5人で、今晩は哲つつあん流に飲もうということになった。新宿に出て終電が無くなるまで飲みました。哲つつあんのように飲みたい、ふるまいたい、生きたい。そう言つて沢登哲一に懐れるもので、粕谷さんには「沢登パーバリズムだよ」といつてからかわれます。粕谷さんは長七およびその衣鉢を継ぐ真ちんこそ、五中・小石川の流れの主流とみておられます。わたしもそれに異を唱えるものではありませんが、それでもわたしにとっては哲つつあんが一番大きな存在なのです。

(4)

真ちんの話にはいります。

真ちんと呼ぶのは入学したときからの、周りの人に做っただけです。生徒だけでなく、先生も陰ではそう呼んでいました。

在学中は親しく接触する機会がありませんでした。でも、よく通る声と眉の鋭い顔だけは、分かっていました。

お会いするようになったのは同窓会でです。とくに『70年史』の編集に巻き込まれたからは、面と向かつてお話しできるようにになりました。

『70年史』は神津康雄さんが始めた紫友ペンクラブの有志が編集にあたり、真ちんが委員長でした。わたしは編集の実務であれこれ調整にあたっていましたから、お会いする機会がふえました。粕谷さんに「日本史の授業でやりのこしの近代史を国語担当の真ちんに1時間で講義してもらった。素晴らしかった」というお話を聞いたのもこのころです。

編集委員会のあと、居酒屋でよく懇談をしました。真ちんが座を外しているときに、「真ちんが佐藤紅緑の息子だって噂、ほんとかな」という話が出ました。ほんとなら、サトウハチローや佐藤愛子と兄弟ということになります。噂をするだけというのは、どうも面白くありません。こういふのを、蛇に怖じずというのか、わたしは席に戻った真

ちんに訊いてしまいました。

「…という噂、ほんとですか」

真ちんは苦笑いしただけで、何とも答えませんでした。酒の勢いで口にするようなことではなかったと、恥じ入りました。おっちょこちよいもいいところです。

その後、佐藤愛子の『血脈』が出て、関係が公になりました。たしかに真ちんは紅緑の庶子として戸籍に入っているということですから、ただし実子ではない。

となると、酒の席で簡単に話せることではありません。真ちんの苦笑いが目に浮かびました。

真ちんのお母さんは芸者時代に真ちんを生み、紅緑の妾となつてから一子を儲けました。その子の出生を届けるとき、紅緑は兄の幸男が父なしでは可哀そうだと、自分の子として一緒に届けたということです。

佐藤愛子はこう書いています。

「五中から一高、東大を卒業すると、教師に…：やがて小石川高校の校長になる。謹言居士だが生徒に慕われて…：」

「佐藤家にたった一人東大出の人格者がいたと思えば佐藤家の血ではないのだった」

わたしの小石川での担任は南鉄、南沢鉄郎さんですが、真ちんと同じ東大国文科出身。その南鉄に、『70年史』で真ちんと会っていると伝えたらこう言われました。

「そりやあたひへんだらう。真ちんは頭の悪い奴は嫌いだからなあ」

南鉄さんにはいろいろ面倒をかけたことが、嫌われていないことは、それでよくわかりました。でも真ちんに嫌われたのかどうか、もう確かめようはありません。

(5)

以上、長七、沢哲、真ちんの流れを辿ったことになるのかどうか、なにしろ、頭が悪いもので…、これまでとします。お後が宜しいようです。